

<黎明館講演会>

演題「島津家久公上洛の旅」

榎原雅治

ただいまご紹介いただきました榎原雅治です。宜しくお願ひ致します。

鹿児島という所は歴史に関心の強いところと伺っております。そうした所で皆様の前で話をさせていただけるということで、光栄ではございますが大変緊張しております。これから1時間少々おつきあいいただければと思います。

今日は島津家久という方の旅の日記についてお話しさせていただきたいと思います。ただ今ご紹介いただきましたように、私はもともと中世の村の生活などを研究しているのですけれども、最近旅の日記・紀行文というものを読むことに心惹かれております。紀行文の何がおもしろいかということですが、中世ですと、文書史料に書かれていることというのは、割合公式的なことが多いのです。戦に勝ったとか、褒美がほしい、所領を安堵して欲しいとか、あるいは年貢を出せとか、これだけしか出せないといった話はよく出てくるのですが、普段の生活は文書というものからは窺いにくいところがございます。江戸時代になると、だいぶ違って来るんだと思いますが、鎌倉・室町時代となりますと、普通の人々の普段の顔、普段の生活というものが見えないということがございます。その点、紀行文を読みますと、そこに住んでいる人にとっては当たり前のことかもしれないけれども、旅行者にとっては物珍しいこと、そのあたりに住んでいる人々の普段の生活を結構書き記しているのです。そういったものに触れまして、紀行文というのはおもしろいなと思っています。

さて、島津家久という人ですが、近世初期、島津家久という人が2人います。1人は義弘の子、薩摩藩初代藩主です。今日お話しするのは、その人ではなく、貴久の四男で、初代藩主家久の叔父さんにあたる方の家久の日記です。従来、家久公の旅日記というのは玉里文庫にありますもの、それから『旧記雑録』に収められているものが使われていましたが、近年、史料編纂所で所蔵している「島津家文書」の中に、江戸初期に作られたと思われる本が見つかりました（村井祐樹「東京大学史料編纂所所蔵『中務大輔家久公御上京日記』、『東京大学史料編纂所研究紀要』16, 2006年）。誰が書いたかはわかりませんが、日記ですと日々書きますから、少しずつ字が変わるはずで、これはずっと同じ墨の色で書かれてありますので、後に清書されたのだと思います。あるいは家久本人によって清書されたものかもしれません。そうならば原本と呼んでさしつかえないと思います。いずれにしても、かなり早い時期のもので、質のいい本だと思います。それを使ってお話しさせていただきます。

まず家久が上洛の旅をした天正3年という年がどういう年か、ということをお話しさせていただきます。天正といえますと織田信長の時代というイメージをおもちだと思います。信長が桶狭間の戦いで歴史の表舞台に飛び出しましたのが永禄3年、1560年です。その8年後に、室町幕府最後の

将軍となる足利義昭という人を奉じて京都に入ります。その後、比叡山の焼き討ちなどがあり、天正元年になりますと足利義昭が信長を倒すために挙兵します。そしてあっという間に負けて河内に逃げてしまう。これが室町幕府のあつけない最後ということになるわけですが、これが天正元年です。また同じ年、信長と北陸の大大名であった朝倉氏・浅井氏の有名な合戦、小谷城の合戦というのがあります。浅井氏が滅びて、於市が娘3人を連れて城を脱出するという戦国の有名な悲劇がございますが、これが天正元年8月のことです。今日お話しする天正3年というのはその2年後です。この年の5月、長篠合戦という大変有名な合戦がありまして、甲斐の武田勝頼が織田軍に大敗北を喫します。翌年には信長は安土城を造ります。そして、室町幕府の最後の頃を牛耳った松永久秀という人が信長に滅ぼされるのが、さらにその翌年ということになります。本能寺の変まではあと5年です。こうした流れを見ていただければわかるように、信長が尾張・三河の地方政権から日本の中央を治める政権になろうという、そのタイミングの年が天正3年ということになろうかと思えます。

では、島津氏にとっては天正3年というのはどういう年でしょうか。島津義久公が島津氏の家督を継いだのは永禄9年、1566年です。その後、日向の伊東氏、薩摩・大隅の肝付氏や伊地知氏という人々を帰順させていく。これが天正の初年であります。天正2年になりますと薩摩・大隅は大體島津氏の下に統一されるということになります。その後は薩隅以外に出ていきます。天正6年には豊後の大友氏を耳川の戦いで破ります。天正9年以降になりますと、肥後・肥前の方へ出ていきまして、南九州の大名から九州全島を統一した大名へと勢力を拡大していくという流れになるわけです。したがって天正3年というのは、島津氏が薩隅を統一し、これから九州の大大名に成長していこうとする直前の頃ということになると思えます。このように織田政権にとりまして、島津氏にとりまして、これからどんどん勢力を拡大していこうというタイミングが天正3年ということになります。この天正3年の織田信長の動静をもう少し詳しく見ていきたいと思えます。

家久は4月16日から6月8日まで京都にいますが、この前後の信長の動きを見ておきますと、信長は3月3日に岐阜を出て京都に向かいます。4月3日に公家を招いて相国寺で蹴鞠会も行っています。その3日後、京都を出発して大坂の方へ出て行きます。当時、畿内で信長に従わない勢力として本願寺勢力というものがございました。大坂の石山本願寺を根城とした一揆勢力です。その一揆に荷担している大名として、河内の高屋城の畠山氏というのがいたのですが、それを攻撃するために4月6日に京都を出発しています。そしてそれを打ち負かしまして4月21日に京都に戻ってきます。その7日後には京都を出発して岐阜に帰る、翌5月になりますと岐阜を出て、長篠で武田軍と戦っている徳川家康を救援に行く、ということになります。5月には武田勝頼と長篠で合戦、岐阜に帰ったのち、また京都にくるのですが、8月、9月になると今度は越前の一揆を攻めに行く。そんな慌ただしい年なんですけれども、その年の中でも長篠合戦や本願寺勢力との戦いというタイミングで島津家久は京都にやって来たということになります。それでは島津家久の旅を具体的にこれから見ていきたいと思えます。

まず地図を見ながら、おおまかに島津家久の旅程をお話ししておきます。島津家久は串木野に城を持っています。串木野を出発して川内まで行き、川内から船に乗ります。肥後に行ったのちは陸

路ですと北九州、瀬戸内の方に出て行きます。そして備後、現在の広島県の東部の辺りに行ったところで船に乗りまして、瀬戸内海航路を経て兵庫まで行きます。兵庫から陸上に入りまして京都に達するということとなります。京都にしばらく居るんですが、伊勢参宮や奈良見物をして、また京都に戻ってきます。そのあと鹿児島に帰って行くんですけども、帰りは経路が全然違いまして、丹波から山陰に出て、時々船に乗ったりしながら石見、現在の島根県の浜田というところまで行きます。ここにしばらく滞在したのち、これはとても早いんですけども、船で僅か数日で長崎の平戸までやってきます。その後も船で一気に川内の方まで戻ってくるという旅路でございます。

では詳しく見ていきましょう。まず出発です。串木野を出て、薩摩山を経て、川内にある開聞という所を経て、新田八幡にお詣りに行きます。船でこの川を渡るようですが、新田八幡にお参りして、そこで食事したり酒を飲んだりということがあるようです。そのあと船で川をゆっくり下っていくんですね。船に乗って大変賑やかに川を下っていったということが書かれています。途中の高江という所には地元の武士の館があったようですが、史料を読みますと、浜に庇を設けて、そこで接待してくれたというようなことが書かれてあります。おそらく川に懸け出しのような建物を作って、そこで宴会をしたということだと思います。さらに船で下って行って、久見崎という河口の港町まで出て行かまして、そこでまた一宴会やる。ここで樺山善久という人から別れの歌をもらっているようです。それに対する返しの歌を作ったということが書かれています。樺山善久は後で出てくる名前ですので、ご記憶しておいていただければと思います。そして、これから海に出て行くこととなります。

串木野を出て不知火海を経て、豊後に至ったあとは陸路で小倉の方に行くんですけども、途中で肥後の山鹿温泉に入ったり、現在の福岡県にある高良神社や彦山にお詣りもしています。中国地方に入りますと、宮島にも参詣しています。それから船で東瀬戸内を通りまして、兵庫の方に入っていきます。兵庫で上陸しまして、芦屋、西宮、茨木、高槻と、現在でも東海道本線が通っている辺りを通って参ります。近世の山陽道は大坂を通りますが、家久が通ったのは古代中世の山陽道とほぼ同じで、大坂には寄りません。出てくる山崎・高槻・茨木・瀬川・木屋（こや）という町はいずれも鎌倉時代以来中世の宿として出てくる町です。

京都近くまで至ったあとがちょっとおもしろいんですね。普通なら山崎まで来たらそのまま京都に入っていくんですが、家久は嵯峨の方に行きます。嵐山を見物し、愛宕山に参詣に行きます。愛宕山というのは現在京都では火防ぎの神として厚い信仰を受けているところです。中世だと武士を守る神様、武の神様だったということですが、中世の史料を見ましても、必ずしも京都の方で愛宕山信仰が強いとも思えないので意外な気がします。けれども薩摩には愛宕神社というのが多いそうですね。川内とか出水の方に愛宕神社というのが結構あるということです。愛宕信仰が薩摩の国に入ってくるのがいつかなのか、私は存じませんが、あるいは戦国時代の頃からあったのかもしれない。ちょっとおもしろいところです。ともあれ愛宕山に行ったあと、京都に入っています。

京都でどこに居を定めるかといいますと、まず里村紹巴という人の所に行きます。里村紹巴という人は連歌師です。連歌というと宗祇という人が大変有名ですけども、これはそれより百年ほど

後の時代です。紹巴は奈良の町人の出身ということですが、連歌で名をなしまして、織田信長や豊臣秀吉からかわいがられます。その子孫は江戸幕府の連歌の師匠になりまして、江戸時代を通して里村家というのは連歌の家として重用されます。紹巴はその祖に当たる人です。ただし、もともと里村家の出身ではなくて、里村の家を継いで里村と名乗ったといわれています。一説では本人自身は、生前は里村とは名乗っていなかったと言われてはいますが、一般的には里村紹巴と言われてはいますので、今日は里村紹巴ということでお話しさせていただきたいと思います。家久はこの里村紹巴と京都での行動を共にするのですが、その中で色々とおもしろい体験をしています。

まず著名人と遭遇するということがあります。家久が京都に入ったまさにその日、織田信長が河内を高屋城を攻めていた戦いを終えて京都に戻ってきます。家久はその場面に遭遇するわけです。その日、家久はちょうど京都に着きまして、信長の行列を見ているんですが、家久の日記にはこういうことが書かれています。信長は下京から上京に入り、相国寺に泊まった。どんな行列だったかという、銭の形の紋を付けた幟を九本立てていた。17ヶ国から集まった兵が数万騎が従っていた。信長の前には、色とりどりの母衣を着た武芸に優れた人々が20人いた。馬の方も非常に豪華です。面を付けたり鎧を着けたり虎皮を着せられたりと、馬も飾り立てられています。信長は乗り換え用の馬を3匹連れている。その馬は衣を着たり、尻尾を袋で覆ったりと非常に豪華なんです。そして信長がいよいよ登場する。どんな格好をしていたか、史料を見ますと、「上総殿の支度は皮衣なり、眠り候て通られ候」とあります。非常に仰々しい行列でやってきたんですが、信長本人は皮衣を着て、何と馬上で居眠りをしていたというのです。おもしろいシーンであると思います。

家久はこの旅の途中で、もう1人著名人と遭遇しております。それが明智光秀です。家久は京都にいますが、京都にいる間、あちこち見物しています。京都だけでなく、その周辺も見物しています。5月14日には、琵琶湖見物にでかけています。里村紹巴と一緒に京都から東山・逢坂山を越えて琵琶湖まで行ったところで、明智光秀より使いがやってきた。「お迎えですよ」ということで馬を連れて来たんです。この馬に乗って、坂本という光秀のお城がある琵琶湖岸の町まで行きます。坂本で琵琶湖の見物などしておりますと、光秀から使者がやってきて、「お城の方にいらっしゃい」とお招きがあったんですね。行こうかどうしようかためらっていると、今度は光秀本人が出てきて、一緒に食事しようということになったと書かれています。

また、光秀が「船に乗りなさい」と勧めて、琵琶湖に浮かべた自分の船に乗せてくれたということが書かれています。史料には「その舟は畳敷くばかりの家を立られ候」と書かれてあります。舟に家を立てていたというんですね。これはちょっとおもしろいです。信長は安宅船という舟を造っているんですが、どういう舟かといいますと、舟に櫓のような建物を建て、船縁を鉄で固めて軍船を造るんです。大阪湾にそれを浮かべて毛利との戦いでは非常に大きな戦果を上げたと言われてはいます。その安宅船というのは、最初は琵琶湖で作ったといわれています。史料に出てきているのは、豊3畳ばかりということですので、それほど大きな舟ではないと思いますが、光秀が家久や紹巴の一行に見せたのは、この安宅舟のことではないかと思っています。さりげない記事なんですけれども、信長の成長していく軍略の一端が垣間見えているシーンだと思っています。

その舟の見物のあと、光秀は4帖半の座敷に紹巴や家久を招いてお茶を勧めています。いわゆる侘茶ですね。ただ、家久はお茶の事はあまり知らなかったようです。茶道の嗜みはなかったようでして、飲み方がわからないのでお湯にしてもらったと書かれています。その後、今度は湖に面した庭で酒宴をしたり魚釣りをしたりということが書かれています。今年の大河ドラマでは「お江」をやっていますが、大河ドラマが終わったあと、3分間ぐらいの歴史の1コマを示すコーナーがありますね。あのコーナーで最近坂本城が出ていました。湖に面した水辺でしたよというような話だったかと思いますが、そこですね。水辺の城の庭では魚釣りが出来た、ということのようです。

そのあと、今度は風呂に入りなさいと勧められて、さらにそのあとは連歌です。連歌というのは室町時代・戦国時代に大流行します。武士・公家・僧侶・庶民も含めて大流行して、大勢で歌を詠んで、ついでに酒も飲んで大騒ぎするということが大流行します。その連歌の会を坂本城で行ったというのです。里村紹巴は有名な連歌師ですので、もちろんそれに加わっています。それが終わると、今度は、光秀は城の中を案内してくれているんですね。どんなことが書いてあるかということ、「城のたくわえ、それぞれの蔵、薪などまで積み置き候事、言の葉におよばす候」。坂本城の中に多くの物が貯蔵されている、燃料や食料などたくさん貯蔵されている。それを光秀が見せてくれたんですね。その後、家久は「そろそろ帰ります」と暇乞いをするわけですが、光秀は「お土産ですよ」と、帷子や宇治の名布などの衣類をもたせてくれたとあります。

光秀というと逆臣というイメージですね。最近は教養あふれる人であったんだというイメージもだいぶ広がってきたと思いますけれども、家久の旅日記に見られる光秀というのは、気配りの効いた親切な人、というイメージに見えるのではないかと思います。一般に知られている光秀とはまた違った光秀の顔が見えるかなと思います。

さて、京都に滞在していた家久がどういう生活をしていたか、京都で何をしていたかという話をしていきたいと思います。お配りした史料の中に、日ごとに家久が何をしたかを簡単にメモした表を用意しておきましたが、見ていただくと随分お寺詣りが多いなと思われるのではないかと思います。金閣、北野天満宮、上賀茂社、嵯峨野の方では散策で有名な二尊院とか釈迦堂とかいったような所に行っています。もちろん嵐山もです。それから祇園、清水寺、三十三間堂、少し離れた所では石山寺、鞍馬寺もあります。現在も修学旅行などでよく行くような所をずらりと行っています。寺社参詣というよりも半ば観光旅行という感じかもしれません。

お寺だけではありません。外にもたくさんの方に行っています。どういう言い方でまとめられるかなと思ったのですが、「古典ゆかりの地」という言葉でまとめさせていただきました。古典ゆかりの地といっても2つに分けられます。

1つは有名な歌人や物語にゆかりの地です。百人一首や源氏物語に出てくるような所にたくさん行っています。藤原定家の旧宅、式子内親王、この人は百人一首や新古今和歌集に作品のある有名な歌人ですが、そのお墓の跡、石山寺、これは紫式部が源氏物語を書いたといわれているお寺ですが、その源氏の間といわれる所に行っています。そしておもしろいことに、この源氏の間で、『源氏物語』の桐壺の巻を読んだりしているんですね。それから、藤原俊成の墓、それから小野篁、こ

の人も平安時代の有名な歌人ですけれども、その終焉の地や小野小町の腰掛け石などという所にも行っています。それから蟬丸や天智天皇、この人たちも百人一首に出てきますが、そのゆかりの地にも行っています。

それから洛北の若紫の里、これはもちろん『源氏物語』で若紫がいたといわれる里ですが、ここで『源氏物語』の若紫の巻を読んだりしているわけです。洛中では夕顔の宿、これも『源氏物語』夕顔の巻の舞台になったのはここだといわれる場所に行ったりしています。

もう1つは歴史的名所という形でまとめてみましたが、だいたい『平家物語』に出てくる所です。京都の弁慶石や木曾義仲が戦死した琵琶湖岸の粟津、その愛人の巴御前の活躍した場所であるとか、義経、俊寛のゆかりの土地などを訪れています。家久という人はもちろん武将でありまして、天正3年前後の鳥津氏の合戦の中でも非常に活躍した人です。この旅の時は28才で、もう少しのちの竜造寺氏や大友氏との合戦でも大きな戦功を挙げた人なのですから、京都での行動をみると文学青年的な印象が非常に強いです。古典文学に憧れるインテリといった顔が見えてくる日記です。

もちろん古典の地をおとずれているだけではなくて、自分自身も文芸活動をしています。先ほど明智光秀と一緒に連歌をした話をしましたが、それだけではなくて、いろいろな人々と京都で連歌を楽しんでいます。どんな人々かといいますと、まずは里村紹巴ですね。この人は先ほどいいましたように連歌界の巨匠です。里村昌叱は里村本家の息子です。心前、これは紹巴の弟子です。京都に居るとき、家久はこの心前の家に泊めてもらっているのですが、これは紹巴の紹介です。そのほかでは、大覚寺義秀、この人は時の関白近衛植家の弟です。それから飛鳥井雅教という人ともよく連歌をやっています。飛鳥井家というのは鎌倉時代以来、江戸幕末に至るまで、蹴鞠と和歌の家として重用された公家です。その当主とも一緒に連歌を楽しんでいます。それから進藤長治、これは近衛植家の家臣ですが、この人も一緒に連歌を楽しんでいます。公家たちや有名な連歌師たちと交流しているわけです。『源氏物語』を閲覧するというのもしています。心前が有名な公家たちが筆を執った『源氏物語』の写本をもっているというので、それを閲覧しています。こういったところからも文芸や古典に親しむ姿が見えてくると思います。

そういった文芸活動とならんで、もう1つ家久の行動としておもしろいのは蹴鞠です。先ほど飛鳥井家というのは蹴鞠の家でもあると申しましたが、その飛鳥井家の親子と一緒に蹴鞠を楽しんでいます。そして、家久は、飛鳥井家の鞠の技は非常にすばらしいと感心しています。家久に蹴鞠を評価するような鑑識眼があったのかというのが疑問なんですが、おもしろいことに、この旅日記の中には、蹴鞠について違う評価をしている場面もあるんです。実は上洛の旅の途上、瀬戸内海の塩飽諸島で地元の人たちが接待として開いた蹴鞠の会に参加しているのです。せっかく開いてくれて、参加してのですが、家久は日記に、塩飽の蹴鞠は無法鞠、足は天に拳がって「その外見苦しきこと申すばかりなく候」、とても下手くそな蹴鞠だと書いているんです。塩飽の人には失礼は話ですが、家久には蹴鞠を見て、これはうまいとか駄目だとか評価する知識はあったようです。

このように、家久の京都での行動を見ますと、古典や和歌に親しむとか、蹴鞠を楽しむといったような、貴族的な教養を身につけていると思わせる行動が目立つわけです。ただ、ここまで話して

きますと、いくつか疑問点も出てくると思います。

1つは、どうやって家久がそんな公家的な教養を身につけたのかということです。古典に対する知識、連歌や和歌に対する知識、蹴鞠に対する知識、そういったものどこで身につけたのか、というのが疑問の1つです。2つめは、なぜ里村紹巴が家久をそんなにもてなしたのか、という点です。その2つの疑問について少し考えてみたいと思います。

まず1つめですが、一般的な背景としては薩摩と京都の関係ということが指摘できます。皆さんよくご存じだと思いますけれども、島津氏はもともと京都の出身です。摂関家の筆頭近衛家の家臣の惟宗氏が島津氏の出身です。薩摩・大隅・日向にわたる大荘園であった島津荘は近衛家の所領でした。近衛家はその所領があるということで、鎌倉時代以来薩摩とは深い交流があります。NHKの大河ドラマ「篤姫」の中でも、幕末の島津家と京都の近衛家が親しい関係であったということが取り上げられていましたが、その関係は古くは鎌倉時代まで遡るということになります。

ただし、室町時代には島津氏の中で嫡流はどうなるかという内紛もありまして、一時、京都と島津の関係を確認することができない時期というのがあります。それが戦国時代になりますと、島津氏と近衛家の関係が復活してくるようです。そのあたりのことは、鹿児島大学の金井静香先生の研究で明らかになっているところです。そのご研究に依拠してお話しさせていただきます。

延徳元年、1489年、これは応仁の乱が終わって室町幕府がかなり動揺してきて、そろそろ戦国時代になろうかという時期ですが、島津氏の重臣の村田という人が上洛して、関白の近衛政家に挨拶に行くということがあります。その翌年には、島津忠良という人が上洛して朝廷で行われている元日の節会を見物しています。戦国時代になりますと、享禄3年、1530年、関白の近衛植家が島津氏に百人一首を贈ったことが確認されています。こういうように島津氏から京都に行くこともありますし、逆に近衛家から薩摩に使いがやってくるということも何度もあります。永禄4年、1561年には、近衛家の家臣の進藤という人が薩摩にやって来て、上井覚兼という島津氏の有力な家臣に連歌の手ほどきをしていることが確認できます。

ここで、交流のなかで文芸に関する知識が島津氏の方に来ていたという証拠を紹介しておきます。現在、史料編纂所では島津家の文書だけではなくて、島津家に蓄積されていた色々な古典類も所蔵しておりますが、そのなかに平家物語があります。いろいろな人の筆が入っておりますけれども、古筆の鑑定家によりますと、近衛信尹とか飛鳥井雅賢という人が書いたものだという極めがされています。いずれも江戸初期の人ですね。家久より少しあとの時代の人になるんですけども、京都の公家社会と島津氏の交流の中で、古典的な作品も薩摩にもたらされていたのは間違いないと思います。

このように、京都の公家文化と薩摩の関係というものは一般的に指摘できるのですが、家久自身がどうやって公家的な教養を身につけたのかにつきましては、もう少し突っ込んで考える必要があると思います。そこで注目したいのは、先ほど名前を出しました樺山善久という人です。樺山家というのは島津氏の支流にあたる家です。島津氏にはたくさんの分家がありますが、その中でも樺山家というのは北郷・町田・新納の諸家と並んで非常に格の高い家です。善久はその8代目の当主です。そして島津貴久・義久のもと、薩摩・大隅を統一する戦いでは数々の軍功を挙げている

人です。それだけではありません。家久との関係でいいますと、樺山善久は家久の奥さんのお父さんです。しかも善久の妻は島津貴久の妹、つまり家久の叔母にあたります。家久は従妹と結婚したわけですから、善久は家久の叔母の夫であり、妻の父親でもあるという関係になります。

どうしてこの樺山善久に注目するかというと、実は善久は天文20年、1551年に上洛しています。いつから上洛していたかははっきりしませんが、天文20年の3月前半に京都に居たことは確かです。そして3月末に、半松斎宗養（谷宗養）という有名な連歌師や、四辻季遠という、これも連歌で有名な公家たちと会っていることが確認できます。薩摩に帰って行く日ははっきりしてしまっていて、9月21日に京都を出発しています。その前日、飛鳥井政綱や宗養と対面してお別れの挨拶をしていることが確認できます。半年以上京都にいたんですね。しかも注目されることに、京都を出発する一週間前の9月14日、飛鳥井家で開かれた和歌会に善久は参加しています。この和歌会に誰が参加しているのかを見ていきますと、飛鳥井政綱、四辻季遠、樺山善久、宗養、清譽。清譽という人は清譽芳溪といいまして、近衛家の家臣進藤長治の弟です。のちに薩摩にやってきて、ずっと薩摩にすることになります。そして里村紹巴も出てきます。紹巴もこの日の飛鳥井家和歌会に出ているんです。ここで樺山善久、つまり家久の妻の父親と紹巴との直接的な接点を確認できるわけです。

このように樺山善久は天文20年に京都に上洛し、京都滞在中は公家を中心とした歌人達と交流し、紹巴とも同席していたことがわかるのですが、さらにのちになりますと、樺山善久は『古今和歌集』についていろいろ勉強しまして、関白近衛植家から古今伝授というものを受けています。古今伝授といいますのは、『古今集』にある歌についての解釈であるとか、『古今集』に出てくる難しい言葉についての意味であるとかのさまざまな知識を伝授してもらうことです。習得するとそのお墨付きをもらいます。この古今伝授を樺山善久は近衛植家から授けてもらっています。

つまり樺山善久は古典についての豊富な知識を持っていたというわけです。この写真は、『古今集』を伝授して下さってありがとうございます、という樺山善久から植家への手紙です。こちらは近衛植家から樺山善久に対する、『古今集』の伝授を長い間お望みのようでしたので伝授しますよという手紙です。いずれも「樺山家文書」です。「樺山家文書」はほとんど現在史料編纂所が寄贈を受けているんですが、近衛植家の手紙が収められている卷子だけは、近衛家の文庫である陽明文庫の所蔵になっています。この卷子だけは樺山家から近衛家に寄贈されたのだと思います。

善久だけではなくて、そのほかにも樺山家の一族は公家文化との接点をもっていたようです。善久のお祖父さんに樺山長久という人がいますが、この人も応仁の乱の少しあとの時代に京都に行き、飛鳥井家で蹴鞠を習っています。善久より少しのちの時代になりますと、善久の子供に忠助という人がいます。この人が書いた文書があるんですが、そこには、これだけの本を下さってありがとうございます、ということが書かれています。どんな本を樺山忠助が手に入れたかという点、『源氏物語』の系図、つまり『源氏物語』に出てくる登場人物の系図ですね。『源氏物語』には大変たくさん的人物が出てきて、読んでみると混乱してしまいますけれども、それを系図で説明したものを手に入れたというのです。それから『源氏物語』の中がよくわからない難しい言葉を書き上げたものであるとか、『源氏物語』の要点を書いたものであるとかを手に入れた、と書かれています。『源氏物語』を読んでないのにこんなものを手に入れてもしょうがありません。読んでいるからこ

そ、こんな系図や難しい言葉の解釈書ももらって喜んだのでしょうか。したがって、これ以前の段階から樺山家では『源氏物語』が読まれていたと考えられるわけです。

このように善久だけではなく、善久のお祖父さんも善久の子供も京都の公家文化と非常に深い接点を持っていたということがわかります。その樺山家の娘を家久という人は奥さんにしているわけですね。樺山家に蓄積されている公家文化、或いは古典に対する教養が家久に継承されていたのではないかと私は思います。そのため家久は京都に行って、有名な連歌師や公家たちと同席しても、臆することなく連歌を詠むとか、蹴鞠に堂々と加わるとかができたのではないかと思います。

では、京都での滞在を終えて、帰国して行く話に移っていきたいと思います。家久は京都から直ちに帰国するのではなく、帰る前に、伊勢参宮に行ったり、奈良で東大寺や興福寺の猿沢の池を見たりしています。それはそれでおもしろいのですが、時間の関係もございますので、そこは省略して帰国の道に入って行きたいと思います。

京都を出発しましたあと、今度は山陰経由、日本海経由で九州に帰ってきます。これもとてもおもしろいんです。山陰道を歩いた旅行記というのは中世では外に例がありません。京都・大坂から日本海側、山陰にどういう経路で出て行ったかということがわかる数少ない史料です。大変おもしろいんですけれども、これも省略しまして、本日は日本海側に出たところから話をします。鳥取を経て、6月21日に大山に入っています。それから鳥取県の一番西部の米子から舟に乗って中海、宍道湖を舟で通過しています。そして23日に出雲大社参詣、24日に石見銀山、これは世界遺産になったということで最近有名になりましたけれども、そこに到着しています。そこを経て浜田という所に至り、ここに2週間くらい逗留しています。ここで風待ちをしていたようです。浜田を舟で出ると一気に平戸までやってくるんですが、いい風が吹かないということで2週間くらい浜田に滞在していたようです。7月になると九州まで戻ってまいりまして、7月末に串木野に帰ってきます。出発するときは久見崎の港から出て行っているんですが、帰ってきた時はその対岸にある京泊に到着しています。そして京泊の港から川内を経て、串木野に帰ってくるということになります。

それで帰りの途次の話ですが、とてもおもしろい事実があります。日本海側を旅している時に多数の薩摩の人たちと出会っております。まず、金山というところ。これは石見銀山のあったところなんですけれども、そこで加治木の早崎・久保田・肝付という人たちと会ったということが書かれています。旅日記のうちの、現在の鳥根県あたりを通過している場面を省略することなく、皆さんにお配りしていますが、行頭に○印を付けている所を御覧ください。皆さんには親しみのある地名がたくさん並んでいるのではないかと思います。温泉津という港町では、伊集院・喜入・秋目・東郷・白羽・入来といったところの人々と会っています。浜田まで来ますと、加治木・京泊・秋目・泊・鹿児島町の町衆や、坊津の衆、それから秋目や京泊の「舟頭」という人たちと会っています。非常に多くの薩摩の人たちが当時の石見にいたということがわかるわけですね。これはいったいどういうことでしょうか。ここで注目しなければならないのは石見銀山だと思います。家久の旅日記を見ますと、京都から石見銀山に至るまでの間は薩摩の人とはほとんど会っていません。偶然に薩摩の山伏と会っている場面もありますけれども、ほかは皆無です。石見銀山で初めて薩摩の人と会い、石

見銀山から西になると本当に多数の薩摩の人たちと会っているんですね。そうなりますと、薩摩の人たちはこの石見銀山をめざしてやってきていたんだらう、家久はそれと出会ったんだらうと考えるのが自然ということになります。ではいったいなぜ薩摩から石見銀山にやってきていたんだらう、ということになります。

その答えのためには、このころの世界での銀の流通がどうなっていたのかをお話ししなくてはなりません。16世紀後半、中国で銀の需要が増大していました。当時、中国では明の国力が衰えつつありました。その1つの原因は、満洲に勃興してきていた、のちに清という帝国を作ることになる勢力との戦いによるものです。その満洲族との戦いによって北辺での戦費がかさんだ、ということがまずあります。その一方で、江南地方の経済発展があります。江南というのは長江—日本では揚子江という名前で知られていますが—その流域が経済発展を遂げます。中国の古代文明は黄河の流域方面が先行しているわけですが、宋代以降、江南が非常に経済的に発展していきます。この2つの理由によりまして、貨幣の需要が中国の国内で非常に高まります。ある研究者は、世界中の銀が当時の中国に飲み込まれていったという表現をしています。

では世界のどこで銀が産出されていたかですけれども、1つは、当時、スペインの植民地だったメキシコです。メキシコから太平洋を渡って運び込まれてくる銀。もう1つは日本です。日本の中でもどこが銀の産出地かという、これは石見銀山ということになるわけです。

石見銀山というのは決してそんなに古い歴史があるわけではありません。大永6年（1526年）、戦国時代の初期に博多の商人によって発見されたものであるといわれています。日本海を航行中の博多商人が航行中に山が光っているのを見つけ、行ってみたら銀が見つかったといわれています。それから、朝鮮の灰吹法という銀の製錬法が石見銀山に導入されます。それによって大変高品質の銀が石見銀山で作られるようになったということです。石見銀山は当時の世界でも有数の銀山となります。銀山をめぐる、中国地方の大名であった毛利氏と大内氏が激しい争奪戦をするわけですが、家久の時代には毛利氏が石見銀山を支配しています。

これは石見銀山を遠くから見た写真です。石見地方というのは山がちな地域でして、日本海の波打ち際まで山が迫っています。ここに小さな盆地があって、少し家並みが見えると思います。ここが石見銀山です。現在は世界遺産に指定されています。海岸のこちらの港町が温泉津です。これが銀の積み出し港になります。ここにたくさんの薩摩の人たちが滞在していたということになるわけです。温泉津を出たあと家久は、島根県中部の浜田に12日間も滞在しています。浜田という港は山陰でも有数の良港で、現在でも重要な港湾です。ここにも薩摩10ヶ所以上からやってきた旅行者が滞在していたことが、家久の旅日記からわかります。

では、どうして薩摩は銀を必要としていたのか、何が目的で薩摩からこんなに多くの人が銀を買いに石見に来ていたのか、それが最後の疑問になると思います。

石見の銀がどうやって中国に輸出されていたのか、それを考えることによって、この謎は解けてくると思います。近年、銀の流通につきましては研究が盛んになっています。真栄平房昭先生や上里隆史先生のご研究で、当時、石見で算出された銀は薩摩経由で琉球に運ばれ、それから一旦ルソンまで運ばれたのちに中国に輸出されていった、ということが明らかになっています。地図で書く

とこうなります。ここがメキシコ、ここがルソンです。メキシコで大量に産出された銀は太平洋を渡ってルソンに運ばれ、スペイン商人によってルソンから中国に行く。一方、日本の石見で産出された銀は、薩摩・琉球を通して、一旦ルソンまで運ばれ、それから中国へ行くという、これが当時の銀の流通ルートであるわけです。真栄平先生や上里先生のご研究で明らかになったのは、石見から琉球まで運ぶ部分、ここが薩摩の商人によって担われていたということです。琉球からルソンに運ぶ部分は琉球の商人によって担われていたようです。つまり、こうした世界規模の銀の流通ルートに、まさに薩摩の商人が組み込まれていたということになります。世界的な銀の流通ルートの中に薩摩や大隅の商人が位置づいて活動していたのです。そういうふうを考えますと、家久の一行というのは、当時の世界的経済の現場に居合わせたのだ、ということが言えると思います。当時の薩摩や大隅の人たちが世界経済の中に位置づいて活動していた、その一端が家久の日記の中に現れたのだということになると思います。

さて、家久の旅も大体終焉に近づきました。お話しを終える前に、1通の手紙をご紹介しますと思います。

史料⑧を御覧下さい。里村紹巴の手紙です。家久が薩摩に帰ってくるのは7月20日になるのですが、この手紙は林鐘10日、つまり6月10日に紹巴がしたためて樺山善久（玄佐）に送ったものです。どういうことが書かれてあるか。3行目以降には、お作りになった歌は良くできていますよ、というようなことが書かれています。古典に関する紹巴と善久との交流がわかる話なのですが、おもしろいのはその前の2行半ほどです。そのまま読みますと「中書無異儀御下国、御大慶御心底奉奏候、拙身等同候、御在京中片時無御他行候、皆々御在京ニ弥奇特と存候」と書かれています。「中書」というのは家久のことです。家久は京都を6月8日、この手紙の書かれた2日前に京都を出発しています。家久の京都出発の2日後に紹巴はこの手紙を書いたことになります。

意識しながら申し上げます。「家久様はお変わりなく帰国の道につかれました。善久様にはさぞかしお喜びだろうと思います。私も同じように思います。御在京中に家久様は片時もお出かけにはなっておりません。京都の人たちは皆、在京中の家久の行動は立派であったと感じ入っています」。

そんなことが書かれています。「他行なく」をそのまま訳せば「どこにも出かけていない」ということになりますけれども、実際にはあちこち見物していますから、どこにも出かけていないという意味ではないと思います。ここで言っている「他行なく」というのは、恐らく、心配するような行動はしていませんよ、妙な所に行ったりはしていませんよ、という意味だと思います。在京中、家久様は遊ぶようなことはしておりません、立派であったとみんな感心しています、ということを行っているのだと思います。先ほど紹介しましたように、樺山善久は家久の妻の父親です。紹巴が家久の舅である善久に対してこういっているわけですから、紹巴は善久に命じられて聲の目付をしていた、そういうことだったのではないかと思います。紹巴は家久に対してずいぶんと親切にしてくれていると思っていたのですが、実は、旧知の仲である善久に命じられて、その聲の在京中の行動を監視していた、というのが本当のところだったのではないかと思います。

それでは、大体時間になりましたので、ここで話を終えさせていただきたいと思います。

参考文献

- 上里隆史 「古琉球・那覇の「倭人」居留地と環シナ海世界」(『史学雑誌』114編7号、2005年)
- 金井静香 「中世末期における近衛家と島津氏の交流—近衛政家・尚通・植家—」(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究「近世薩摩における大名文化の総合的研究」研究成果報告書、2003年)
- 紙屋敦之 「亀井琉球守考」(『幕藩制国家の琉球支配』、校倉書房、1990年)
- 真栄平房昭 「十六・十七世紀の東アジア貿易と琉球」(『経済史再考』、大阪経済大学日本経済研究所、2003年)

※ 本稿は、平成23年2月19日(土)に黎明館講堂で行われた、榎原雅治先生(東京大学史料編纂所教授)の黎明館講演会「島津家久公上洛の旅」の御講話内容を筆記したものです。なお、都合により当日配布の資料は割愛させていただきました。また、実際の御講演ではパワーポイント等を用いられた視覚的な工夫もなされておりましたが、本稿ではその画像情報等の掲載も省かせていただきました。そのため、結果として部分的にわかりづらくなっている所も数カ所あると思われませんが、全体として大変興味深いお話であり、掲載する意義も大きいと判断致しました。その点御了承ください。(文責 黎明館調査史料室)